

## 「早生まれ」と運動成績・学習成績

岩手大学教育学部 内山三郎

## 1. はじめに

日本における野生動物の出産の時期は、エサの豊富な春または秋あるいは夏の暖かい季節が一般的である。実験動物としてのネズミの場合は、ヒトから常に給餌されるため季節による変動は見られない。ヒトの場合も、保存技術の進歩によって食料は日常的かつ十分に確保されているため、季節による変動はほとんど無い<sup>1)</sup>。

日本においては誕生月の違いにより、1月から3月の間に生まれた者が「早生まれ」と呼ばれている。これは日本の学校制度が4月入学のため、3月生まれの者は6歳になるとすぐ入学し、4月生まれの者は6歳になった後ほぼ1年を経過した翌年の4月に入学することによる。4月生まれに比べて3月生まれは早く入学することにより、2月生まれ・1月生まれと一緒に「早生まれ」と言われる。小学校入学の時点においては、3月生まれの児童と4月生まれの児童ではほぼ1年の違いがある。「早生まれ」の者は早く入学して早く学業を終えることになるため、早く社会に出て労働力となるという観点から、「早生まれ」は「得生まれ」とも呼ばれる地域もあるようである。

「早生まれ」の者は、早く社会に出て労働力となる以外に何らかの「得」が得られているのであろうか。「鉄は熱いうちに打て」という諺が示すように、少しでも早く学校教育に入ることは早期教育的にも効果が期待できるとも考えられる。過去には、幼稚園入園以前から教育を開始すべしとする過度な早期教育の勧めもあり<sup>2)</sup>、有名幼稚園のお受験騒動等の社会現象もみられた。しかし、その後に見られた家庭内暴力や引きこもり等の現象は、早期教育の弊害とする見方も現れ<sup>3)</sup>、早期教育が有効であるのは音楽等の限られた分野のみのものである。

今村・沢木の報告<sup>4)</sup>によれば、「早生まれ」の者はそれ以外の者に比べて明らかに体格的に劣っており、低年齢ほどその体格差が大きい。体格差は体力差に反映され、さらには運動能力差にも反映されるため、早生まれが得であることは無いようである。その顕著な例として、高校生の甲子園出場経験者の生ま

れ月別の人数調査により、春・夏とも4月生まれの球児が最も多く、3月生まれに向かって徐々に減少している。4月生まれの甲子園球児は、3月生まれの実に2.5倍から3倍となっている。しかし、成人であるプロ野球選手では、4月生まれから3月生まれへの月別人数の減少のスロープが緩やかになり、同じく成人である日本陸上競技選手権大会出場者の生まれ月別人数では、生まれ月による顕著な差は見られない。これらの結果および成人では生まれ月による体格差は消失しているという事実から、低年齢児の体格差を反映した運動能力の差は成人においては消失しているとしている。

## 2. Jリーガー（プロ・サッカー選手）の生まれ月

低年齢時に顕著にみられる同学齢期の中での「早生まれ」の体格的・体力的劣勢は、確かに成人に達すると共に消失する。しかし、体格的・体力的劣勢を反映した運動能力（成績）の劣勢は、成人の後には自然に解消するものであろうか。少なくともプロ野球選手の生まれ月別人数のデータを見る限り、4月生まれと3月生まれの人数の比較では約2倍の開きがあり<sup>4)</sup>、「早生まれ」の運動能力（成績）の劣勢が完全に解消しているようには思えない。

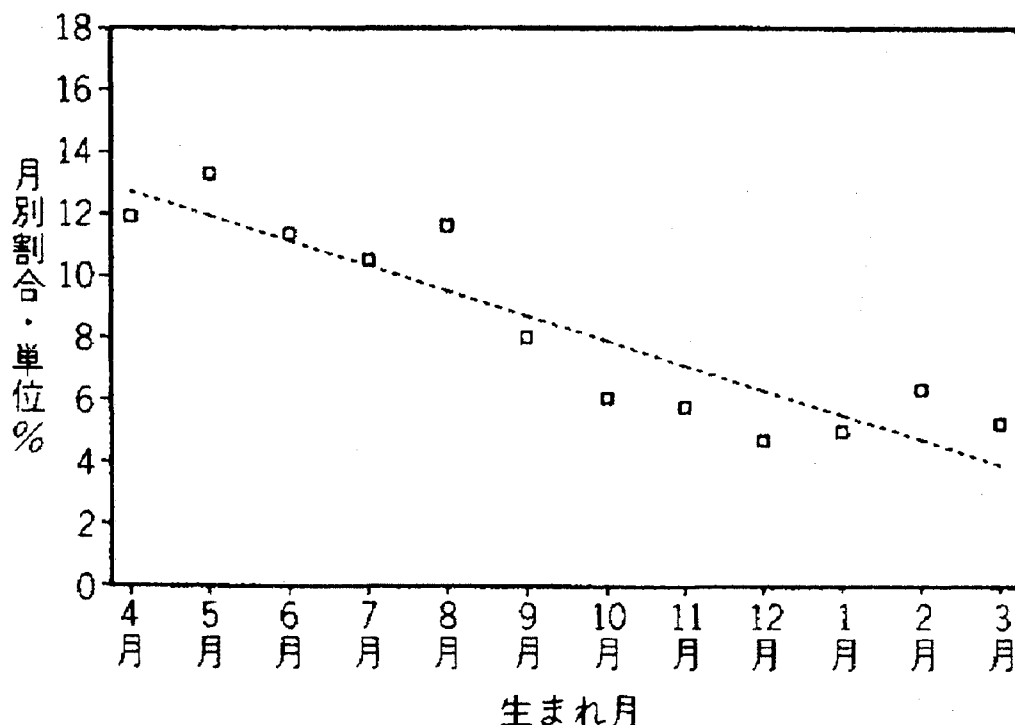


図1. Jリーグ登録全選手の月別割合とその回帰直線<sup>5)</sup>

低年齢時における「早生まれ」の運動能力（成績）の劣勢が、成人においては解消されているのかどうかを確認するため、成人のプロ・スポーツ選手集団であるＪリーガー（プロ・サッカー選手）の生まれ月について調査をした。その結果、Ｊリーガーでは「早生まれ」の選手が少ないことが明らかになった<sup>5)</sup>。同時に、人口動態から見た同年齢者には、生まれ月別の人数にはほとんど差がないことが確認されている。Ｊリーガーの生まれ月による人数の差はプロ野球選手よりも顕著で、高校球児と同様、4月生まれから3月生まれに向かったの顕著な人数の減少が見られた（図1）。これは、学年で輪切りにされた集団において、「早生まれ」の児童・生徒が体力的劣勢のために試合等で活躍する機会が少なく、従って誉められて励みを得る機会も少なくなり、その運動から早々に離れることになって、結果的に運動能力に差が付くことになるものと考えられる。更に詳しく解析すると、1軍に相当するトップ・チーム選手集団よりも2軍に相当するサテライト・チーム選手集団で、より顕著な「早生まれ」選手数の減少が見られた。これは学年で輪切りにされた学校スポーツの影響で、「早生まれ」の運動能力（成績）の劣勢が2軍（サテライト・チーム）選手に顕著に表れていることを示している（図2）。1軍（トップ・チーム）の選手では、本来の運

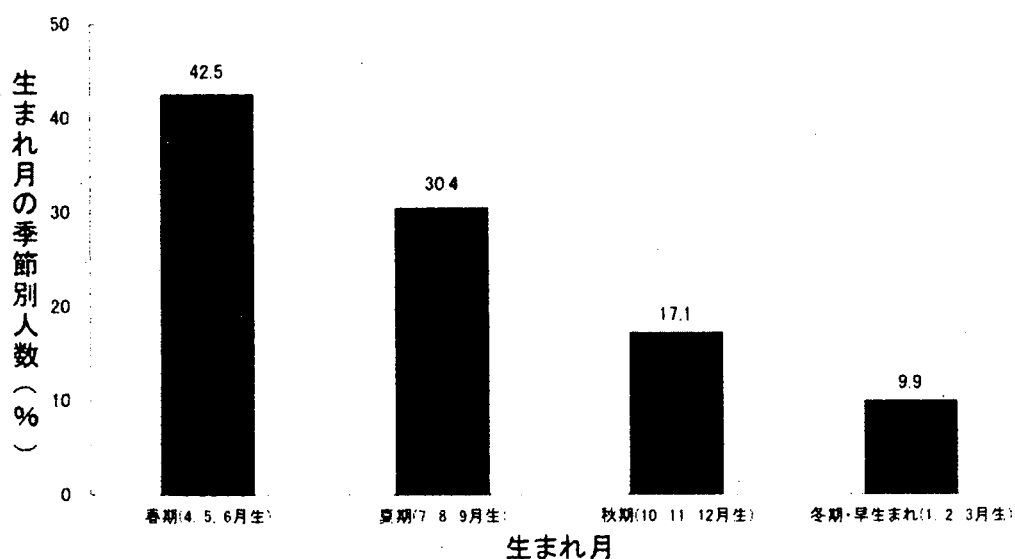


図2. Jリーグ（二軍登録選手）・生まれ月の季節別人数割合<sup>5)</sup>（グラフ改変）

動能力が「早生まれ」の負の影響を超越する結果、2軍（サテライト・チーム）選手に比べて「早生まれ」の負の影響が緩和されるものと考えられる。

### 3. 他の運動種目選手の生まれ月

他の球技種目であるバレーボール・リーグやバスケットボール・リーグの選手においても、同様の「早生まれ」選手数における減少が見られる。一方、プロ・ボクサーや日本中央競馬会の騎手では、「早生まれ」の選手数が少ないという現象は見られない<sup>6)</sup>。また過去のオリンピック出場選手についての調査では、アマチュアリズムが厳密に運用されていたためプロの選手の出場はなく、1960年から1992年までの日本の出場選手においては逆に「早生まれ」の選手数が多く、全体の3分の1を占めるという結果が得られている<sup>7)</sup>。

このように、児童・生徒間にあまり人気のないスポーツ種目で、プロのチームも存在しないような競技種目においては、成人の後まで「早生まれ」の負の影響が残るという現象は見られない。

### 4. 運動成績における「早生まれ」の影響への対応

上述の通り、児童・生徒の人気スポーツ種目においては、「早生まれ」の劣勢がみられることが明らかである。これは日本における4月入学という学校教育が、大きく関与していることを示唆している。同じような結果は、イギリスのプロ・サッカー選手の生まれ月でも見られている。即ち、9月入学のイギリスでは、「早生まれ」に当たる6月・7月・8月生まれの選手が少なかった<sup>8)</sup>。

これまで、「早生まれ」には幼少時の体格的劣勢・体力的劣勢・運動能力的劣勢が認められてきたが、成人では体格差・体力差の解消と共に運動能力の差も解消するとされてきた。しかし人気スポーツにおいては成人においても格差が見られ、「早生まれ」選手数の劣勢が存在している。これは学年で輪切りにされた時、「早生まれ」における見かけの運動能力の劣性が、成人した後までも影響している結果と考えられる。即ち、幼少時の体格格差が、成人後においても負の影響を及ぼしていることを示している。そのためヨーロッパ・サッカー連盟では1973年より「早生まれ」対策を講じており、早生まれによる体力的劣勢の中に本来の才能を埋もれさせないよう、監督・コーチに注意が喚起されている。

またJリーグにおいても2002年には、サッカー選手と生まれ月の関係が検証され、「早生まれ」の劣勢に隠された選手本来の能力については育成過程で見抜いていく努力が唱えられている<sup>9)</sup>。

## 5. 「早生まれ」の学習成績への影響

「早生まれ」が運動成績に負の影響を及ぼしているならば、学習成績に対する影響についてはどうであろうか。今村・沢木<sup>4)</sup>によれば、高校までは学習成績に対して「早生まれ」の負の影響があることを示している。即ち、入学難関校の進学校では「早生まれ」の割合が少なく、非進学校では逆に「早生まれ」が多いこと、また「早生まれ」はリーダー的役割経験の割合が少なく、逆にいじめられた経験の割合は多いことを明らかにしている。従って、幼少時における「早生まれ」の体格的劣勢は、高校時代まで影響が継続していると報告している。同様の結果は、他県における入学難関校と非入学難関校の「早生まれ」の割合調査でも得られている<sup>10)</sup>。

それでは、高校以後における「早生まれ」の影響はどうであろうか。超入学難関大学の一つの国立大学医学部および医学部としては入学難易度が高くないある私立大学医学部における「早生まれ」の割合は、両者とも早生まれ以外との差は見られなかった<sup>11)</sup>。入学難易度に大きな差があるとはいっても、医学部は基本的に高校での成績上位者が入学しているので、「早生まれ」の影響は出ていないものと考えられる。

入学難易度が相対的に高くない私立大学工学部における「早生まれ」の割合を見てみると、入学者全体では特に差は見られない。しかし、筆記試験を経た一般入試入学者と推薦入試入学者とに分けて解析すると、「早生まれ」の割合は一般入試入学者で低く、推薦入試入学者で高かった<sup>12)</sup>。この結果は、「早生まれ」の影響が大学入学にも出ていることを示している。高校入学についてはほぼ全員が入学する世の中になったが、大学入学は高校卒業者のほぼ5割である。高校の卒業時に中位の成績のものでは、大学入学において「早生まれ」の負の影響が出ていると考えられる。さらに、学歴（大学歴）が成人においても影響を及ぼす限りにおいて、「早生まれ」は負の影響を引きずっていくことになると考えられる。

## 6. まとめ

学校教育の制度として入学時期が年一回である限り、一定数の「早生まれ」が生ずるのは必然的結果である。従って学校教育に携わる者には、「早生まれ」に体格・体力の劣勢が存在することを認識し、運動能力や学習能力に対して負の影響が出ないように、日頃からの気配りが求められる。特に低学年児童においては、年齢ではなく月齢で考えるという気配りが必要と思われる。Jリーグにおいても、ヨーロッパ・サッカー連盟に倣った「早生まれ」に対する気配りが唱えられるようになってきている<sup>9)</sup>。また一部の公立・私立学校においては、小学校の入学試験において生まれ月を考慮した入学者選抜をしており、生まれ月の偏りをなくす対策を講じている。東京都内の私立小学校においては、すでに2006年の時点で半数以上の学校が入学者選抜における「早生まれ」対応を実施している<sup>13)・16)</sup>。こうした対応をしている小学校では、入学後においても「早生まれ」に対して適切な対応がなされていることが期待される。

しかしながら「早生まれ」の影響については、単に教育者・指導者の気配りに頼るといふことのみで解決するものではないであろう。子供の成長度合いについては個人差もあるので、親が1年遅れの入学を選択できるというアメリカ等の制度を導入することも、「早生まれ」の影響を解消する方策の一つであろうと思われる。また最近、大学の部分的秋期入学制度の導入や、東京大学の提唱による秋期入学への全面移行が話題となっている。この秋期入学を大学だけに限るのではなく、小学校から導入することも「早生まれ」の影響を解消する方策の一つではないかと思われる。小学校入学における部分的な秋期入学の導入は困難と思われるが、大学附属の小・中・高校が、学園全体として秋期入学に移行するということであれば不可能な方策ではないであろう。社会全体で考えたとき、春期入学・秋期入学の小学校が混在する状態となり、親の側から入学の時期を選択することができることになる。入学時期に選択肢のある、より多様性に富んだ社会を目指すことも「早生まれ」対応の一つではないかと考えられる。

\* ) 本総説は、2009年 岩手生物教育研究会 第43回総会・研究会(2009.1.10)における記念講演「生まれ月と成績」の内容を元に、加筆修正してまとめたものである。

## 参考文献

- 1) 人口動態統計 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>
- 2) 井深 大：幼稚園では遅すぎる、ごま書房 (1971)
- 3) 高良 聖：警告！早期教育が危ないー臨床現場からの報告ー、日本評論社 (1996)
- 4) 今村 修・沢木康太郎：生まれ月が子供の心身におよぼす影響について、東海大学紀要体育学部、19、73-79 (1989)
- 5) 内山三郎・丸山圭蔵：Jリーグ・プロサッカー選手における早生まれの影響、体育の科学、46、67-71 (1996)
- 6) <http://www.volleyball.gr.jp/hayaumare.htm>
- 7) 門 亘：生まれ月がスポーツ選手に及ぼす影響について、東海大学体育学部卒業論文 (1994)
- 8) Dudink, Ad : Birth date and sporting success, Nature, 368, p.592 (1994)
- 9) 日本プロフェッショナルフットボールリーグ：Jリーグアカデミーレポート第1弾：サッカー選手の誕生月の検証 Jリーグニュース, No.84 (2002) (<http://www.j-league.or.jp/document/jnews/84/10.html>)
- 10) 内山三郎：未発表資料
- 11) 内山三郎・丸山圭蔵：医学部入学と早生まれとの関係、医学教育、25、343-348 (1994)
- 12) 内山三郎：未発表資料
- 13) 森 浩：早生まれは得？損？微妙な”格差”埋める動きも、産経新聞 Web-Site (2006) (<http://www.sankei.co.jp/enak/2006/dec/kiji/04lifebirthmonth.html>)
- 14) 慶應義塾幼稚舎：入試情報 Q&A (2012) (<http://www.yochisha.keio.ac.jp/exam/qa.html>)
- 15) 学校法人 山梨学院：山梨学院大学附属小学校 児童募集について よくある質問 (Q&A) (2012) (<http://www.yges.ed.jp/qa.html>)
- 16) 小学校受験新聞：筑波大学附属小学校 入試研究白書 (2011) (<http://www.jyukennnews.com/02study/st-tukuba.html>)